

第4回条例検討専門委員会ヒアリング報告

日時：平成22年6月22日（火）14時00分～

会場：さいたま市立西原小学校

出席者

さいたま市立西原小学校 教頭 玉井康仁
特別支援教育コーディネーター
特別支援教育委員
特別支援学級担任

条例検討専門委員

嶋垣委員、宗澤委員長、山本委員、野辺委員

施策推進協議会委員

中根委員、矢崎委員

意見の概要

西原小学校での特別支援教育について

- ・すぐ近くに小児医療センターがある関係で、ハンディをもった子どもが集まってくる。子ども達も車椅子の子に自然と手を貸し、受けて入れている。
- ・教師が連携しているので、学年間で問題を話し合い、認識を共有できている。
- ・教師間での話が教頭や校長まで上がってくるのが素晴らしい。他の学校ではこの報告がないという課題を抱えているところが多い。

身近に障害児がいることの効果について

- ・岩槻には混合保育の流れがもともとあったので、保育園が障害児を積極的に受け入れている。保育園の頃から障害児と地域で生活しているから、学校にあがってもそれが当たり前になっている。地域にそうした土壌があるのがポイントではないか。
- ・障害児が頑張っている姿を健常児が見ることで、彼らも頑張っているということ認識し、受け入れている。中学校からではこうはいかない。就学前後からこういう経験をさせておくことが重要だ。
- ・逆に、一緒に育っているからこそ遠慮がなく、喧嘩もするしいたずらもする。それは障害者差別ということではなく、健常児同士の問題と同様に解決に向けて話し合った。
- ・通常学級の子に、特別支援学級の子の何か光るところを見せてあげると、「この子はすごいん

だな」と、なんとなく溝が埋まっていく。

- ・学習内容ではなく、学習空間を共有することに意味がある。

特別支援学級での指導について

- ・通級指導で困ったら特別支援学級の先生に教材を借りて、通常学級全体で使ったりしている。
- ・学力や能力の差は存在するが、「色々な子がいるからみんなで力を合わせていこうね」という考えが大切だ。
- ・LD 児の指導などに学校支援員や学生ボランティアはすごく有効だ。
- ・「大人になるスピードは1人1人違う」
- ・一概に教科学習ということではなくて、挨拶や話すときに相手の目を見ることなど、日常生活に必要なことを身につけさせていきたい。
- ・家庭とも連携し、「こんな宿題を出しているが家庭ではどうですか」「こういうことは苦手なようですよ」などと状況を伝え、理解してもらって、一緒にゴールを目指してやっていくことが大切だ。
- ・九九や漢字の書き取りがどれだけ出来るかよりも、実生活に結びつくような指導をしている。
- ・その子自身に着目して、長所をどれだけ伸ばしていけるかということを常に考えている。基準ありきではなくて、子ども側から見た支援が大切だ。プロの教育者として1人の人間を教育するということ。

保護者との関係について

- ・保護者から心配して相談の電話をかけてくることがある。
- ・保護者は子どもを通して情報を受け取る。毎日学校に見に来ているわけではない。
- ・特別支援学級の保護者と通常学級の保護者とのコミュニケーションが大切だ。
- ・子どもの方が人権や差別ということに敏感だ。保護者の中には何十年も前の考え方をしている方もいる。
- ・保護者に障害があって問題発生している場合、手話通訳などを使ってコミュニケーションをしっかりと図っていく姿勢が問題の解決につながる。

学校における障害者雇用について

- ・学校ほどバリアフリーになっていないところはない。ハンディをもった方が働くのは至難の業だ。